

春風が吹くと
カエルが恋する

2009.03.04

ある、春の日のこと。

カエルが、菜の花に、恋をしました。

だって、しかたがないんです。

春風が とつぜん
くすくす笑いながら 菜の花畑に やってきて。

その春風に背中を押された 菜の花が、
ひょいっと 腰をかがめたかと思ったら。

長い眠りから覚めて、ぼーっとしたまま 歩いているカエルの頬に、
チュッ と キスをしたんですもの！

カエルは びっくりして、いっぺんに 目が覚めました。

ど、どういふこと！？

そういうこと！

見上げると、背の高い菜の花が、目を細めて 微笑んでいました。

おはよう！
カエルのお嬢さん。
お目覚めは、いかが？

その瞬間。

カエルは『恋に落ちる』という言葉の意味を、知りました。

初めて会った その日から。

カエルは、毎日 こっそりと 菜の花に会いに行きました。

こっそり見ていたつもりだったけど、
実は、背の高い菜の花からは、カエルの姿が 丸見えでした。

ぴよんぴよん♪ と スキップしながら やってくるカエルは、
彼の近くまで やってくると、急に 跳ねるのをやめます。

そして、ほかの菜の花たちの間に隠れ、そっと 陰から
彼を見つめているのです。

朗らかに微笑む 菜の花の姿を見るだけで、
カエルは 胸が いっぱいになりました。

毎日が とっても幸せでした。

そよそよと流れる春の風も、
カエルの恋を応援してくれているようでした。

ある日のこと。

カエルの背中に 衝撃が走りました。

菜の花畑の菜の花たちが まもなく刈り取られる、
という噂を 耳にしたからです。

カエルは、菜の花の元へ 駆け出しました。

菜の花さん、菜の花さん。
あなたは もう 刈り取られてしまうの？

こうなったら 恥ずかしがっている場合では ありません。

カエルは、菜の花の耳に届くよう、
一生懸命 ぴよんぴよんと 飛び跳ねました。

ああ、カエルのお嬢さん。
そのようだね。

菜の花に、驚いた様子は ありませんでした。

僕は、幸せだったよ。
君のような かわいいお嬢さんが、毎日 会いに来てくれて。

菜の花の言葉に、
カエルの目は 涙で いっぱいになりました。

神様、神様、お願いします！
菜の花さんを、助けてください！！

それがダメなら、私も 菜の花さんと一緒に、
逝かせてください！！

カエルが 力の限り叫んだ、そのとき。

ものすごい音を立てて、春一番が やってきました。

春一番の大風は 竜巻を起こして、
菜の花を 根こそぎ倒し、カエルを 思いっきり 吹き飛ばしました。

強く差し出された菜の花の腕に つかまろうとしたけれど、
カエルの手は、小さすぎて。

あまりの風の強さに 気を失い、
カエルは、そのまま 飛ばされていきました。

ふと 気がつくと、
カエルの隣には、菜の花が 倒れていました。

彼は もう、菜の花の姿をしていませんでした。
おまけに、カエルと同じくらいの背の高さになっているようでした。

が、カエルには わかりました。

隣にいる この彼こそが、自分の恋した菜の花だ、と。

そのとき、春風が 音もなく そばに来て、
カエルの背中を そっと 押しました。

カエルは、あの日のことを 思い出しました。

生まれて初めて 恋に落ちた、あの日。
このひとは、春風にまぎれて……

カエルは、静かに 起き上がり、
もはや 菜の花ではなくなっている菜の花の頬に
そっと キスしました。

その温かい感触に、菜の花が 目を覚ますと。

菜の花が もはや 菜の花ではなくなっているように、
カエルも また、もはや カエルでは なくなっていました。

彼の瞳の中には、
彼と そっくり同じカタチになっている 彼女の姿が
映し出されていました。

こうして、ふたりは、肩を並べて 歩きはじめました。

ふたりの 影法師も また、春風に 揺られながら。

仲良く肩を並べ、
長く長く どこまでも 伸びていました。